

## 二〇一六年の江戸川乱歩関連展示

落合 教幸

旧江戸川乱歩邸とその資料の管理を立教大学が引き受けたのは、二〇〇二年のことである。二〇〇三年には池袋西武で江戸川乱歩展、二〇〇四年には東武百貨店池袋店で「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」が開催された。その後も神奈川近代文学館の「大乱歩展」（二〇〇九）など、いくつもの文学展に協力してきた。乱歩を中心としたものだけでなく、小樽文学館の「中井英夫展」や町田文学館ことばらんどの「日影丈吉展」といった、乱歩と交流のあった文学者の企画への協力もしてきている。

二〇一四年は乱歩生誕百二十年にあたり、いくつもの雑誌やテレビ番組などで取り上げられた。翌二〇一五年は乱歩没後五十年で、企画は更に増えた。二〇一六年からパブリックドメインに入った乱歩の著作は「青空文庫」などでも公開されるようになり、舞台や映像作品でも取り上げられる機会も増加したようだ。

旧江戸川乱歩邸への取材申し込みは、二〇一五年と比較して一六年はや

や減少したが、一方で展示企画への協力については四件あった。それぞれ多くの入場者があったとのことで、乱歩への高い関心が継続していることがわかる。以下、センターのかかわったこれらの企画について紹介する。

### 福井県ふるさと文学館

#### 「日本ミステリー文学展

「藤田宜永からの招待状」

福井県ふるさと文学館は二〇一五年に開館した新しい文学館である。福井ゆかりの作家や福井を描いた作品などを中心とした文学資料を扱う。

藤田宜永は福井市出身の現代の作家で、『鋼鉄の騎士』で日本推理作家協会賞、『愛の領分』で直木賞を受賞している。今回の展示は明治から始まる日本ミステリーの歴史から、現代の藤田の資料までを集めた展示となった。そのなかで江戸川乱歩の資料も展示された。「うつし世は夢」の色紙のほか、乱歩旧蔵の自著などの展示があり、原稿も紹介された。

前橋文学館 特別企画展

「パノラマ・ジオラマ・グロテスク

——江戸川乱歩と萩原朔太郎」

前橋文学館は萩原朔太郎を中心として、前橋ゆかりの詩人たちの資料を扱う文学館である。

朔太郎と乱歩には交流があった。若き日には浅草公園に行き、メリーゴードランドに乗ったというような話もある。今回の展示では乱歩が保存していた朔太郎からの書簡をはじめ、書籍、原稿など当センターの管理する資料を数多く貸し出した。乱歩と朔太郎にはともに手品への興味があり、乱歩が所蔵していた手品道具と乱歩自身による説明のメモが展示された。

関連企画のひとつとして、萩原朔美氏（前橋文学館館長）と平井憲太郎氏の対談もおこなわれ、多くの聴衆を集めた。また、展覧会に先立ち、九月にはおふたりの写真を乱歩邸で撮影した。朔太郎が乱歩邸を訪れ、土蔵内で語り明かしたというエピソードを、両者の孫のおふたりが再現するというかたちである。

鎌倉文学館 特別展

「ビブリア古書堂の事件手帖」

鎌倉文学館は鎌倉にゆかりのある文

学資料を収集保存し展示する文学館である。旧前田侯爵家別邸でもあり、鎌倉の海を眺めることもでき、バラ園も有名な施設となっている。

三上延の「ビブリア古書堂の事件手帖」は、北鎌倉を舞台とするシリーズである。古書をめぐるミステリー作品で、第四巻では江戸川乱歩の本が扱われる。執筆に際し三上氏が調査に旧江戸川乱歩邸を訪れたほか、フジテレビでドラマ化された際には乱歩旧蔵書に関連して当センターも協力した。

今回の企画では、シリーズの他の巻であつかわれる、太宰治や宮沢賢治、手塚治虫などと並び、乱歩のコーナーも設けられた。乱歩の資料は、少年探偵などの書籍のほか、作品でもあつかわれる「二銭銅貨」の草稿などが展示された。また、関連イベントとして当センター学術調査員の落合による文学講座が開催され、乱歩の資料について解説した。

パリ日本文化会館・デイドロ大学  
「江戸川乱歩、

あるいは近代日本の迷宮」

パリ日本文化会館とデイドロ大学で国際シンポジウム「江戸川乱歩、あるいは近代日本の迷宮」が開催された。

二〇一四年に開催された川端康成の企画に続き、乱歩が取り上げられることになったのである。

十月十四日と十五日のシンポジウムでは、ヨーロッパ・アメリカ・日本の研究者による発表のほか、作家の桐野夏生氏の講演もおこなわれた（桐野氏の講演は『すばる』二〇一七年二月号に掲載されている）。

乱歩作品のフランスでの紹介は『芋虫』の一九五四年と比較早かった。今世紀に入ると『陰獣』の映画化、丸尾末広の漫画の仏訳などを通じて乱歩作品が受容されている。

日本文化会館では十日間にわたり乱歩映画祭も開催された。田中登、内川清一郎、増村保造らの作品が上映された。

また、同じく日本文化会館で乱歩関連資料の展示もおこなわれた。それぞれの時代の乱歩著書の他、『新青年』『寶石』といった掲載誌、帽子・眼鏡などの愛用品も展示された。解説パネルも大きなものが作成され、乱歩の全体像が示される展示となった。

当センターからは学術調査員の落合が乱歩資料についての研究発表をしたほか、展示品の貸し出しやパネル用写真の提供などをおこなった。

旧江戸川乱歩邸の展示

「ルパンと黄金仮面」

以上四つの企画で乱歩関連の展示が行われ、資料の貸し出しなどで協力した。

また、旧江戸川乱歩邸でも、パリでの展示と関連して、ルパン関連の資料展示をおこなった（二〇一六年十月～二〇一七年三月）。

乱歩は昭和四年に、講談社の雑誌『講談倶楽部』に「蜘蛛男」を連載する。「涙香とルパンとを混ぜ合わせたようなもの狙って書き始めた」と『探偵小説四十年』で乱歩は書いている。この時期、保條竜緒訳のルパン全集が刊行されていて、乱歩はその推薦文を書いたりもしている。『黄金仮面』をはじめとして、この時期の乱歩の長篇にはルパンの影響は非常に大きい。さらに、「怪人二十面相」からはじまる少年探偵シリーズへともつながっていく。

展示の準備は学生が主体となって進めた。展示品の選定からキャプションなどの作成はすべて学生の手によるものである。乱歩蔵書からルパンシリーズの翻訳や原書を展示したほか、大型のパネルで関連年表を作成した。

落合教幸（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員）

二〇一六年の江戸川乱歩関連展示



福井県ふるさと文学館



前橋文学館



鎌倉文学館



パリ日本文化会館

旧江戸川乱歩邸「ルパンと黄金仮面」

